

中学校音楽科における「鑑賞」指導法に関する実践研究 — 体を動かす活動を取り入れ、実感を伴う知識理解を促す鑑賞学習 —

A Practical Study on Appreciation Instruction for Junior High School
: Appreciation Learning that Incorporates Physical Activities and Promotes
Knowledge and Understanding with a Sense of Reality

安田 真梨* 河添 達也**
Mari YASUDA Tatsuya KAWASOI

要 旨

中学校音楽科における鑑賞領域では、体を動かす活動を取り入れることで、音楽の特徴について実感を伴った知識理解を促す必要がある。本研究では、手拍子によるリズムアンサンブルや、歌唱と器楽を組み合わせた体を動かす活動を適切な場面で取り入れることで、実感を伴う知識理解を促す授業実践を試み、その成果と課題について省察を行う。

〔キーワード〕 中学校音楽科, 鑑賞, 知識理解, 体を動かす活動

はじめに

鳥根県では、教職経験年数に応じた教員研修を行うことが義務付けられている。教職経験2年目に達した教諭を対象とした研修、および同3年目研修では、いずれも自立・向上期に求められる教育職員としての資質能力の向上を図ることを目的として実施されるが、この目的のもとで実施する研修のことを「フォローアップ研修」と呼ぶ。研修2年目は、「公開授業と授業研究」および「課題に基づく実践」をとおして実施されるのに対し、3年目では、「課題に基づく実践」に替わって「短期体験研修」が加わる¹⁾。本研究は、安田が、令和2年度および3年度にフォローアップ研修の一環として実施した実践をもとに考察したものである。

I 研究の背景

筆者(安田)は教職大学院在学時に、打楽器を用いた即興による創作教育をテーマとして実践研究を行った。平成後期の当時は、生徒のみならず教師にとっても創作分野への苦手意識が強く、生徒にとって馴染みやすい打楽器を用いた創作学習を提案したのである。その実践のなかで、新たに「音づくりRUN」という導入学習を提案し、常時活動に取り入れた。数多くの

*松江市立第三中学校(執筆当時)

**鳥根大学学術研究院教育学系

打楽器を円状に並べ、その楽器の周りを走りながら即興的に音を出してみようという活動である。思考・判断を繰り返しながら表現を工夫して作品を練り上げる、という創作学習本体に入る前に、まずは体を動かして音を出してみよう、と企図してみたのである。そうすると、即興的に「叩いて出た音」から新たなイメージが生まれ、次の音を出すために生徒の体が自然と反応するようになった。体を動かすことで「音を紡ぐ」という実感がわき、学習の深化を促すことができたのである²⁾。

鑑賞領域も、創作分野と同様に、知覚の共有や実感を伴う感受を促すことが難しい音楽科の学習領域である。令和元年度に安田が新着任した中学校でも、鑑賞領域の授業実践をとおして以下のような課題を感じ取っていた。

1. 生徒が音楽から感じたことや聴き取ったことを全体で共有する際に、単に聴くだけでは理解しづらい生徒がいること。
2. 音楽の特徴について授業者が説明する時間が長くなりがちで生徒が受動的な姿勢になること。
3. 題材で取り扱う教材で注目させたい音楽の特徴を絞り切れず、学習内容があいまいになること。

特に1. 2. の課題は、生徒が音楽の特徴を、実感をもって理解することの困難さを示すものでもある。そこで本研究では、先述の「音づくりRUN」における成果を参考としつつ、実感を伴う理解を促すことを目途として、体の動きを取り入れた鑑賞領域の授業実践を行い、その成果と課題について考察する。

II 研究の目的・方法

中学校学習指導要領においては、音楽科における知識の習得に関する指導に当たって「音楽を形づくっている要素などの動きについて実感を伴いながら理解し、表現や鑑賞などに生かすことができるようにすること」³⁾が重要であると示されており、「I 研究の背景」で述べた課題1および2の解決に向けた授業改善が必要となる。

また、各学年の「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導に当たっては、「知覚したことと感受したこととの関りを基に音楽の特徴を捉えたり、思考、判断の過程や結果を表したり、それらについて他者と共有、共感したりする際には、適宜、体を動かす活動を取り入れるようにすること」⁴⁾とある。このことから、鑑賞領域の学習においても、適切な場面で体を動かす活動を取り入れることは、音楽の特徴について実感を伴った理解を促すことにつながるのではないかと考える。

なお、同様に先述した課題3. の課題解決に向けては、鑑賞楽曲に関する教材研究を重ね、音楽を形作っている諸要素を焦点化して、生徒に思考・判断のよりどころをより明確に示すことが必要だと考える。

これらの研究目的に沿って、まずは全学年に対する鑑賞指導計画の概要を作成し、1年目は第2学年を対象に、2年目に第3学年を対象とした授業実践を行う。そののちに、本授業実践における生徒の発言や反応、ワークシートの記述内容などをもとに、生徒の変容や研究の有効性について考察する。

Ⅲ 授業実践

以下は、本研究の骨子となる体を動かす活動との関連がわかるようにまとめた、令和2年度および3年度の鑑賞領域における指導概要である。

対象学年	本時の目標	思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素	体を動かす活動
1学年	箏曲「六段の調」における箏の様々な奏法による音色の変化を感じ取ることができる。	音色	・口唱歌で歌う活動 ・箏の様々な奏法（引き色や搔き爪、押し手、裏連）で表現する活動
2学年	「交響曲第5番第1楽章」の動機の反復や音色、テクスチャを聴き取り、曲の構造と曲想の関りを味わって聴くことができる。	動機の反復、音色やテクスチャの変化	・「交響曲第5番第1楽章」冒頭部分の動機のリズムを手拍子によりアンサンブルを行う活動
3学年	能「敦盛」の謡や囃子のリズム、速度、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じしながら、知覚したことと感受したこととの関りについて考える。	リズム、速度の変化、旋律	・敦盛が戦いのありさまを再現する場面の謡と囃子を、体を動かしながら表現する活動

上記の中から、本研究では第2学年および3学年の授業実践を取り上げ、その成果と課題について考察を行う。

1. 第2学年における授業実践

(1) 授業の概要

- 授業者：安田真梨
- 授業対象：島根県内中学校第2学年
- 授業期間：令和2年11月
- 題材名：「曲の構造と曲想との関りを考えながら聴こう」
- 題材の目標：動機の反復と変化の面白さを味わい、曲の全体をとらえる活動を通して、曲の構造と曲想とを関わらせながら鑑賞する能力を養う。
- 題材の評価基準⁵⁾

《領域・分野と評価の観点との関連》

	ア) 音楽への関心・意欲・態度	イ) 音楽表現の創意工夫	ウ) 音楽表現の技能	エ) 鑑賞の能力
A・歌唱				
A・器楽				
A・創作				
B・鑑賞	○			○

《題材の評価規準》

ア) 音楽への関心・意欲・態度	エ) 鑑賞の能力
<p>① 「交響曲第5番第1楽章」の雰囲気や曲想の変化、オーケストラの音色に関心をもち、動機との関わり合いを聴く活動に主体的に取り組もうとしている。</p>	<p>① 「交響曲第5番第1楽章」の動機の反復や音色、テクスチュアを聴き取り、曲の構造と曲想との関りを味わって聴くことができるようにする。</p> <p>② 「交響曲第5番第1楽章」の動機の反復や音色、テクスチュア、形式などと、曲想との関りをふまえながら、感じ取った音楽のよさや面白さを自分の言葉で書くなどして、音楽のよさや面白さを味わって聴いている。</p>

○指導と評価の計画（全3時間）

時	ねらい	主な学習内容	評価規準と評価の方法
1	<p>「交響曲第5番第1楽章」の雰囲気や曲想の変化、オーケストラの音色に関心をもち、動機との関わり合いを聴くことができるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校で学んだオーケストラの楽器を振り返る。 ・「交響曲第5番第1楽章」を視聴し、楽器の形や音色に注目してワークシートの楽器の配置図をつくってみる。 ・視聴をとおして、印象に残った楽器について気づいたことを全体で出し合い、線譜で共有する。 ・反復される動機のリズムに注目して、「交響曲第5番第1楽章」冒頭部分を視聴する。 	<p>ア① 観察 発言の様子</p>
2 (本時)	<p>「交響曲第5番第1楽章」の動機の反復や音色、テクスチュアを聴き取り、曲の構造と曲想との関りを味わって聴くことができるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・反復される動機のリズムについて、前時の学習を振り返る。 ・反復される動機のリズムに注目して、「交響曲第5番第1楽章」冒頭24小節間を聴く。 ・動機のリズムを手拍子で演奏する。 ・動機のリズムに注目して楽曲の冒頭部分を聴き、気づいたことや感じ取ったことを出し合う。 	<p>エ① 観察 発言の内容 ワークシートの記述内容</p>
3	<p>「交響曲第5番第1楽章」の動機の反復や音色、テクスチュア、形式などと、曲想との関りをふまえながら、感じ取った音楽のよさや面白さを自分の言葉で書くなどして、音楽のよさや面白さを味わって聴くことができるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・動機のリズムの音色と重なりの変化について、前時の学習を振り返る。 ・「交響曲第5番第1楽章」のうち、音楽の雰囲気が変化する箇所のきっかけとなる音を探しながら聴き、気づいたことや感じたことを発表して線譜で共有する。 ・線譜を使ってソナタ形式であることを知る。 ・作曲者ベートーヴェンについて知る。 ・これまでの学習のまとめとして楽曲を聴き、紹介文を書き、全体で共有する。 	<p>エ② 観察 紹介文の記述内容 発言の内容</p>

○体を動かす活動内容

本題材は全3時間構成の授業であり、2時間目に、本研究の骨子となる「実感を伴った知識理解を促す」ことを目的とした体を動かす活動を取り入れた。具体的には、L.v. ベートーヴェン作曲「交響曲第5番第1楽章」冒頭部分で反復される動機のリズムに注目して聴取したあと、実際に動機のリズムを手拍子で表現する活動を取り入れた。まず冒頭の動機を3つのリズムに分別し、手拍子によって全員でそれぞれのリズムを打ち、体を動かしながら確認した。その後、クラスを3つのグループA・B・Cに分け、それぞれに3種のリズム動機を割り振って、代表生徒の指揮に合わせてオリジナル楽曲通りのリズムアンサンブルを行った。その際、視覚的に動機の反復を理解しやすいような板書(図1)を工夫した。



図1 動機の反復を示した板書

(2) 成果と課題

音源を聴くだけでは十分に理解しづらかった生徒にとっても、手拍子による体を動かす活動を体験することで、冒頭動機のリズム反復によって形作られている楽曲構成を、実感をもって理解できていた様子が表情や動作から見て取れた。さらに、手拍子によるリズムアンサンブル活動のあと、再度楽曲の冒頭部分を鑑賞することで、楽曲聴取だけでは気づかなかった諸要素の聴き取りや、豊かな感受を促すことができたようである。体を動かす体験と動機のリズムを重ね合わせて聴取することで、リズムの聴き取りにとどまらず、音色やテクスチャ、強弱の変化の気づきや、それらの働きが生み出す特質や雰囲気の変化を感じ取るきっかけとなったのではないかと考えられる。これらのことは、生徒のワークシートの記述から読み取ることができる。以下は、生徒が授業後に記入した感想の一部を掲載する。

- ・「タタタンがたくさんあっても成立するのがすごいと思った。同じリズムでも音の高さがちがったら全然迫力がちがうなあと思った。」
- ・「タタタンの音が一番大きく出たり、一番小さく支えるような感じになったりして、タタタンは万能だと思いました。」
- ・「『デデデーン』のリズムが演奏中に何回も違う形ででてきておもしろかったし、リズムアンサンブルも楽しくできたのでよかったです。」
- ・「同じ音でも強弱をつけたり、音の高さを変えたりして、それぞれ色々な雰囲気を出しているんだなあとと思いました。また、何回も繰り返し同じ音(リズム)を出していても、ちがった音に聞こえたりするんだなあとと思いました。」
- ・「タタタンの部分は少ししかないと思っていたけど、よく聴いてみると、細かいところにもそのリズムがあって驚きました。」
- ・「同じリズム、タタタンがくりかえされていることが分かりました。はじめは見つけられなかったけど、手のリズムでわかるようになりました。」

一方で、課題も散見された。手拍子によるリズムアンサンブルを通して、音楽を形づくっている要素（特にリズム）に対する知覚の感度を高め、実感を伴う理解を促すことができた反面、その理解に基づく感受については、今一步学習の深化が見受けられなかった。動機のリズムの反復や音色、強弱、テクスチュアの変化の気づきを、どのように感受に結びつけるか、授業者の指導言に課題があると感じている。聴き取った（知覚）諸要素を共有したうえで、そのことによってどのような情動が喚起（感受）されているのか、さらに踏み込んだ問いかけを行ってみたい。例えば、授業中の生徒の気づきに対して「音が突然小さくなるとうどう感じる?」、「音がだんだん高くなることでどんな雰囲気になる?」など、感受を引き出す声がけを積極的に行いたい。

2. 第3学生における授業実践

(1) 授業の概要

- 授業者：安田真梨
- 授業対象：島根県内中学校第3学年
- 授業期間：令和4年2月
- 題材名：「日本の伝統音楽の特徴を理解して、その魅力を味わおう」
- 題材の目標：
 - 1) 音楽の特徴とその背景となる文化や歴史、ほかの芸術との関わりについて理解する。(知識及び技能)
 - 2) 音色、リズム、速度、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関りについて考えるとともに、音楽表現の共通性や固有性について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴く。(思考力、判断力、表現力)
 - 3) 謡や囃子の音色やリズム、速度の変化、歴史的背景などに関心を持ち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組むとともに、我が国の伝統音楽に親しむ。(学びに向かう力、人間性等)

《題材の評価規準》⁶⁾

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>知 ① 能「敦盛」の曲想と音楽の構造との関りについて理解している。</p> <p>知 ② 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性について理解している。</p>	<p>思 ① 能「敦盛」の謡や囃子のリズム、速度、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関りについて考えている。</p> <p>思 ② 音楽表現の共通性や固有性について、能の音楽のよさや美しさを味わって聴いている。</p>	<p>態 能「敦盛」の謡や囃子の音色やリズム、速度の変化、歴史的背景などに関心を持ち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。</p>

○指導と評価の計画 (全3時間)

時	ねらい	主な学習活動	知・技	思	態
			〈 〉内は評価方法		
1	能「敦盛」の謡の音色やリズム、速度の変化に関心をもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ・歌舞伎「勸進帳」の長唄を聴き、歌舞伎の音楽の特徴について既習事項を振り返る。 ・能「敦盛」の一部分を聴き、歌舞伎の音楽の特徴との共通点や相違点を考え共有する。 ・能「敦盛」のあらすじを知る。 ・敦盛が戦いのありさまを再現する場面の謡の模範演奏を聴き、謡を謡う。 ・謡の特徴について気づいたことや感じたことをワークシートに書き、全体で共有する。 		思 ① 〈観察〉 〈ワークシートⅠ〉	態 〈観察〉 〈ワークシートⅠ〉
2 (本時)	能「敦盛」の謡や囃子のリズム、速度、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関りについて考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・謡の特徴について前時の学習を振り返る。 ・囃子を知る。 ・前時に謡った場面の囃子を演奏する。 ・演奏した場面を鑑賞する。 ・囃子の特徴や謡と囃子の関わりについて気づいたことや感じたことをワークシートに書き、全体で共有する。 	知 〈観察〉 〈ワークシートⅡ〉	思 〈観察〉 〈ワークシートⅡ〉	態 〈観察〉 〈ワークシートⅡ〉
3	音楽表現の共通性や固有性について、能の音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> ・能の音楽の特徴について、これまでの学習を振り返る。 ・能の音楽と歌舞伎の音楽の、音楽表現の共通性や固有性について考え、それぞれのよさや面白さを味わって聴く。 	知 〈観察〉 〈ワークシートⅢ〉	思 〈観察〉 〈ワークシートⅢ〉	態 〈観察〉 〈ワークシートⅢ〉

○体を動かす活動内容

本題材は全3時間構成の授業であり、そのうち2時間目の授業で体を動かす活動を取り入れた。能「敦盛」では、源氏の武将熊谷直実が、平敦盛を一の谷の合戦で打ち取ったが、当時16歳であった年端もいかない敦盛を偲んで出家し、その弔いの中で敦盛の化身である霊に出会い、敵同士であった両者が仏縁によって真の友となる様子が演じられる。いわゆる2番目物と呼ばれる「男」能である。その終盤で、敦盛が戦いのありさまを再現する場面の囃子の演奏部分を、体の動きを取り入れて表現する学習に取り組んだ。具体的には、囃子の太鼓を手拍子で、小鼓

を電子キーボードで代用して演奏した。模範演奏をまねてみたり、指導用CDを聴いたりしながら、謡の声や囃子の音色、響き、言葉の発音の仕方、リズムや旋律の特徴について気づいたことをワークシートに記入し、意見交換を行った。また、謡と囃子の特徴を視覚的に捉えやすくするため、ワークシートには簡易な図形譜（図2）⁷⁾を載せ、表現活動を通して気づいた特徴を書き込めるよう設定した。

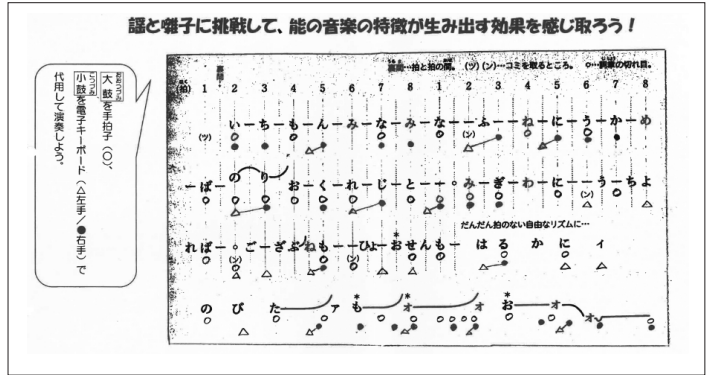


図2 能「敦盛」囃子の図形譜

(2) 成果と課題

能「敦盛」の鑑賞時に、体を動かしながら表現する活動を取り入れたことによって、音源を聴くだけでは十分に理解しづらい能の音楽の特徴や、それらの働きが生み出す特質や雰囲気をもっと理解できた様子が、生徒の表情や動作の観察を通して見て取れた。また、ワークシートの記述からは、実感を伴って聴取することで、リズムや速度などの諸要素を豊かな感受に結び付けて学び取っていることが伺えた。以下、ワークシートの生徒の記述内容を、一部抜粋して掲載する。

- ・「まず、独特なリズムをもっていてとても慣れにくく感じました。しかし、演奏をもう一度やってみると、一つ一つの音が聴こえてきて、本当はきれいな曲なんだということが分かりました。また、気づいたことは、太鼓はあえて少しずらす場面もあるということです。『トントントン』とスムーズなところもあれば、『トン…トントン、トン』と少しずれているところもあるように思いました。」
- ・「1段目のときは大鼓と小鼓は大体同じようなリズムだったけれど、2・3段目になるにつれてテンポが速くなっていったので、平敦盛が置かれて行って焦っていると考えた。最後にピタッと終わるところがすっきりする。」
- ・「『遙かに』から言葉がのびているのは船にのることができなかった敦盛の黄昏れている様子かと思ったが、嘆きに近い感じがした。」
- ・「3つの音（謡・大鼓・小鼓）が重なることが少なく、一つ一つの音に注目できるようになっていると思った。大鼓で拍を感じることができ、裏拍にも音が不規則に入ってきていて、能だけの独特な雰囲気をさらに強めているなと思った。小鼓のタイミングがぴったりというわけではない所にも、自由な雰囲気が感じられた。スピードが上がって盛り上がる所になると音数が増えて引き込まれるようになった。」
- ・「謡の速さが変わる所で囃子のリズムと叩く回数も変化したので、戦いの盛り上がりどころなんだなと思った。焦りも感じた。そこから急にゆっくりになるので、敦盛の諦めや悲しみが感じられる。」
- ・「(自分達が演奏に使った楽器は) 本物の楽器ではないけど、覚えられたらリズムよくできていいし、本物はやっぱり迫力があってすごいなと思いました。」

一方、本実践でも課題が散見された。

知覚したリズムや速度を通して、敦盛の心情を想像する感受の深まりは見受けられたものの、それがどのような情景だったのかを感じ取った記述はほとんど見受けられなかった。叙景描写への感受は一定程度促すことができたが、情景描写への想像を促すことについては不十分であったといえる。能は、オペラのような華やかな舞台設定はなく、最小限の舞台効果から情景を想像する必要がある。また、能面を付けることによって、生身の演者の表情が意図的に隠され、役者の動きも極力抑えられている。つまり、演じられている情景や表情を鑑賞者自らが主体的に想像し、読み取ることを求められる芸能なのである。このような、「能」における鑑賞時の見方・考え方を培うことのできる適切な指導言を、準備しておかねばならないと感じている。

IV まとめ

本研究では、中学校音楽科における鑑賞学習時に体を動かす表現を取り入れることで、実感を伴う理解を促す授業実践を行い、主に生徒のワークシートの記述をもとに、その成果と課題を明らかにした。

第2学年の授業実践では、手拍子によるリズムアンサンブルを取り入れ、板書の工夫を行った。これによって、楽曲構造への理解を深めるとともに、リズム以外にも音色や強弱、あるいはテクスチャなどの諸要素に対しても、繊細な聴き取りを促す効果があることが見受けられた。またそれらの働きによる曲想の違いを感じ取っていたことも分かった。一方で、そのような知覚の深化を、感受の深まりに誘うことについては課題が残った。

第3学年における授業実践では、生徒にとって馴染みの薄い「能」の鑑賞を題材として扱った。馴染みが薄いということは、岡田(2009)によれば、「能」に対する聴く型を持ち得ていないのだともいえる⁸⁾。大鼓を手拍子、小鼓を電子キーボードで代用して表現する体の動きを伴う活動を取り入れたことで、教材への生徒の興味関心を高め、リズムや速度などに対する能ならではの特徴を実感を伴って理解することができた。このことは、岡田の言う「聴く型」や、「能」鑑賞への見方・考え方を培うことに繋がったのではないかと考えられる。また、謡と囃子を図形譜で示したことは、生徒に「能」の音楽の特徴を視覚的に捉えさせ、鑑賞時の知覚の深化に繋がった。ワークシートの記述からは、第2学年に比して第3学年では、より豊かな感受への言及が見受けられたが、さらに主体的な聴取を促す必要があることも明らかになった。音楽を形作る諸要素の聴き取り(知覚)を根拠として、具体的な感受を促す指導言を開発し、精査していきたい。また、このような、知覚と感受の往還的な学びを、3年間を通して促し続けていく必要性を、改めて認識しているところである。

謝辞

フォローアップ研修を進めるにあたっては、島根県教員研修所の所長をはじめ、指導主事や同僚の先生方に数多くのアドバイスをいただいた。経験の浅い筆者の授業実践に対し、熱意をもって受講してくれたすべての生徒のみなさんにも深く感謝する。

また、筆者2人の「謡」の師であり、喜多流謡の師範であった故・門脇伊利先生の薫陶を受

けなければ、授業者である筆者自身が「実感を伴う」授業実践を行うことは不可能であった。門脇先生のご冥福を心からお祈りすると共に、全幅の謝意を表したい。

付記

本研究は、安田の教職大学院での研究成果を基に、鳥根県の「フォローアップ研修」の一環として実施したものである。共著者の河添は、研究全体の構想と研究目的や方法の検討を行い、本論の最終的なまとめを分担した。

- 1) 教員研修の内容および実施要項は毎年更新される。ここに示したものは、令和元年度新規採用者に対して適用された内容である。
- 2) 安田真梨・河添達也「高等学校芸術科音楽における「創作」指導法に関する研究－打楽器を用いた即興的な創作－」『学校教育実践研究』第2巻（2019）pp93-95に詳述。
- 3) 『中学校学習指導要領解説 音楽編』文部科学省（平成29年7月）p13
- 4) 『中学校学習指導要領解説 音楽編』文部科学省（平成29年7月）p101
- 5) 本授業実践の時期は、第8次中学校学習指導要領から第9次への移行期にあっており、第2学年実施年度は第8次、第3学年実施年度は第9次学習指導要領に基づく評価の観点を採用している。
- 6) 同上
- 7) 『中学生の音楽2・3下』掲載資料 教育芸術社（2021）p48
- 8) 岡田暁生『音楽の聴き方』中公新書（2009）「はじめに」

参考文献

- ・『中学校学習指導要領解説 音楽編』文部科学省（平成29年7月）
- ・高倉弘光「小学校低学年における動きを伴った鑑賞授業 ダルクローズ・リトミックとの関連から」『音楽教育実践ジャーナル』第12巻1号（2014）pp75-78 日本音楽教育学会
- ・北川真里菜「音楽科における低学年期での『体を動かす活動』の有用性 知覚感受の深まりと実感を伴った理解をめざして」『和歌山大学教育学部附属小学校紀要』第42巻（2019）pp70-75 和歌山大学教育学部附属小学校